

前衛短歌の問題

現代職人歌から古代歌謡まで

岡井隆 著

省 検
略 印

昭和五十五年十一月五日 印刷発行 ©

定価二五〇〇円

前衛短歌の問題

現代職人歌から古代歌謡まで

著 者 岡 井 隆

発行者 小 野 富久子

発行所 短歌研究社

郵便番号一〇二

東京都千代田区二番町八番地

電話(二六二)八六七八番

振替(東京)九一二四三七五番

印刷者 林 俊男

製本者 大沢 藤兵衛

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

短歌の問題

目次

第Ⅰ章 前衛短歌と写実——11

新しいリアリズムの模索——13

『木目』の作者／『木目』の歌／その時代の前衛歌人

韻律のリアリズムとはなにか——23

韻律のリアリズム／武川氏のパラフレーズ／大河原惇行氏に／自著
からの引用など／リアリズムという言葉

田井安曇における写実——33

我妻泰に／自愛と事実偏好

北原白秋・即興詩——43

春の鳥／余談／ふたたび春の鳥／経験的事実について／虚と実／余
談の二／観念世界と現実／反・白秋

長塚節の最後の旅——54

節の晩年／折生迫／宮崎の夏と秋／旅の最後／歌の流浪

土屋文明の新しいさ——65

疎開先の文明／呼びかける歌／水の景／茂吉と文明／不易と流行

彼岸のリアリズム——山中智恵子—— 76

車族の歌／歌材としての車／用語上の問題／視野について／山中智恵子の『青章』／へきみこそ／へ駅馬／彼岸のリアリズム

飢餓と記録——文明・肇—— 87

氷見の文明／河上肇と飢餓歌／結び

塚本邦雄の近作など—— 98

邦雄の近代／歌謡の遊狂性／ひろし・ぬやまと歌垣／意味論／佐美雄と邦雄／むすび

第二章 古代詩遠望—— 109

耳について—— 111

口について／耳について／耳と拍リズム・句リズム

声について—— 121

声について／神楽歌について／音の交響について

歌謡性について——132

神楽歌のつづき／軟派風のよみ／エロチックな連想／歌謡の効用／
歌謡的な時代の歌／むつかしいところへさしかかった

眼について——中村憲吉——143

憲吉の眼／構図と色彩／叙景詩の発生とへ全体喩／憲吉の叙景歌

ヤマトタケルについて——154

浪漫精神について／熟瓜について／詩人ヤマトタケルについて／地
の文のリズムについて／ホモ・ポリティクスについて

表記と文体——165

文体とはなにか／文体と表記体／国見歌の表記／国思歌について

神話の旅——176

斎藤茂吉の「南国紀行」／神話イデオロギーの旅／神話と叙景／ひ
そかなへ回心／茂吉のぶつかったもの

続・神話の旅——187

神話とはなにか／神話とミュートス／高千穂峰の歌／エピソード
一つ

古代詩の「よみ」——197

身体を浮かす工夫／創る人間として／吉本隆明の「よみ」

英雄伝説と宣長——207

英雄伝説のパターン／ヤマトタケル伝説の構成／景行帝の仕うちに
ついて／プロットの中断の意味／三つの罪の紹介／宣長の合理主義

鳥獣の眼について——218

ヤマトタケルの西征／宣長対吉本隆明／成瀬作「流されスワン」／
鳥獣の眼

短詩における対唱性——229

古歌謡から／子規の手紙歌から／賢治の文語詩から／三種のへ対唱
性

あとがき——241

前衛短歌の問題

現代職人歌から古代歌謡まで

第Ⅰ章

前衛短歌と写実

新しいリアリズムの模索

新しいリアリズム、などと判ったような顔をして発言したことを、つくづく後悔しています。自分でも判らないからこそ、数人の座で発言し、反響をたしかめ、たしかめつつ考えをすすめる。このやり方はごく自然な（そして有効な）手段と思われませんが、わたしは、もう何年もの間、そういう場を持っていますでした。

だから、稀にそういう場へ出ると、ついあらぬことを口走ってしまうのだ、許せ。などというつもりはありません。ただ、まだ熟していない考えを口外したばかりに、つまらぬ誤解を生んだとすれば、へ考えをすすめる✓上に邪魔になろうかと反省したまでのことです。

というわけで、現代短歌の現場にあって、なにごとかを積極的に主張する仕事は（久しくそこから遠ざかっていただけに）気が重いのですが、折角与えられた機会です。平素、発言をひかえて来た、いわゆる「写実」派系の人たちの作品にふれながら、「新しいリアリズム」を模索してみたいと思います。

1 『木目』の作者

「ポポオ」の第十七号には、上田三四二氏の『木目』評が載っています。その中で上田氏は、「ポポオ」に「親しみを覚える」理由として、次のように言っている。

「おかしい言い方に聞こえ、また抵抗を覚える向きもあることを懸念しながらこの親しみの内容をもうすこし具体的に言えば、私は『ポポオ』の歌を読むと気持が安らぐのです。ふる里に帰って来たような気がするのです。それだけ、現在の歌壇というものの平均的な位置が、写実的なものから遠ざかっているのでしょう」

たった三つのセンテンスを引用しただけなのに、なんと現代的な発言かと思えます。わたしの場合は、上田氏とちがって、若年時に『アララギ』に直接身を寄せることを「した人間ですから、より一そう、「ポポオ」にふる里を感じてもよさそうですが、故郷がなつかしく心安らぐ場所ばかりではないのは、文学上の故郷の場合も同じことで、「ポポオ」（それは「アララギ」的なもののある一面にすぎませんが）に対するアンビバレンツはまぎれもありません。

わたしは、上田氏のいう「現在の歌壇の平均的な位置」が、見せかけの上で「写実的なものから遠ざかっている」という事実とは別に、現在の歌人の平均的な位置が、大きく写実の側にかたむいていく事実を忘れることができません。ジャーナリズム（つまり歌壇ということです）は、つねに新しさを追って動き、そこに浮華性もあると同時に、われわれの耳目を惹くままなましさもあるわけでしょう。そのジャーナリズムを中心に形成される歌壇のイメージが、「写実的なものから遠ざかっている」と見えるのは、反面において、いまなお、「写実的なもの」（これは基本的には、大正期に「アラ

「ラギ」が完成した作歌法の伝承と考えていい）が大半を占める短歌の実態を指示しているとも見られます。（そして、事実、わたしたちが、結社雑誌を少し丁寧によんでみれば、大半の歌が、上手下手の差はあっても、写実的な傾向の歌——つまり、写実の約束に従い、そこによるこびを見出すという大正アララギ以来不変の価値観に支えられた歌——によって占められていることがわかるはずです。）さて、よそごとはさておき、「短歌」三月号の萩原千也氏の文章「自己への肉薄」を読んで、二、三感ずることがあったので、それを書いておこうと思います。

この短文の中には、わたしの名前も出て来ますが、その点は後でふれます。

「自己への肉薄」は、いかにも、実作者らしい文章で、こういう人に「短歌における新しいリアリズムについて」何か書けと迫るジャーナリズムのむごたらしさを感じさせます。自分の歌や、「ポポオ」の仲間の歌を引用して語っている部分には、ほとんど聴くべきところはありません。たとえば「私の歌が、生活を強く打ち出そうとしているのに対し、大河原の作品は、生活に立脚したところの歌」だといった解説がありますが、これでは、大河原惇行と萩原氏の歌の特質を言いあてているといえませんか。しかし、なんとなく作者の覚悟、信念は伝わって来ます。

その点では、萩原氏の考え方をもっともよく表わしているのは、一文の冒頭の、本阿弥日州という刀工（？）の話です。

「人間国宝、本阿弥日州氏の刀剣研磨の様子をテレビで見た。十五、六種類の砥石を使いわけ、機械力を一切用いないこの仕事は、職人の仕事の内でも、並はずれた忍耐が必要であり、ごまかしの全く通用しない世界と見た。